

SSR 海外提携型調査研究 2004 年度 プロポーザル

申請者： 安村 通晃 慶應義塾大学 環境情報学部 (主査)

1. 調査研究のテーマ

「ユーザー指向ユビキタスコンピューティングに関する調査研究」

2. そのテーマの戦略的意義 / 位置付け

ユビキタスコンピューティングは、世界的にも広く注目を集め、現在精力的な研究活動が行なわれている。わが国においては、その技術的基盤が整い始め、また、特にわが国において家電の研究開発が盛んであったことも加えて、一層、関心を集めている。

しかしながら、現在わが国で行なわれているユビキタスコンピューティング研究の多くは技術指向であって、特定のシーズに基づく研究開発を行い、その後、キラーアプリケーションを求めるといった傾向が強い。

我々は逆に、そもそもユーザが本来の要求として持つニーズからスタートして、それに基づき、ユビキタスの技術を用いた、具体的な状況下でのユーザ活動支援のための研究を立ち上げたいと考えている。ユーザの活動を起点としたユビキタスの研究活動は、海外においては少数ではあるがすでにくつか存在するので、我々はそれらから多くを学べるものと期待している。

ユビキタスコンピューティングは、提唱され初めてから既に 10 年以上経過しており、ここでは、ユーザー視点に立ったユビキタスコンピューティングの具体的な可能性と問題点について、海外の研究者/研究機関とも連携の上、調査研究することを提案する。

3. 調査研究の概要

本調査は、ユーザの立場に立ったユビキタスコンピューティングを海外の研究者とも連携の上、具体的に以下の項目に関して調査研究を行なう。

- (1) ユビキタスにおけるユーザの行動履歴データの活用法
- (2) 位置情報およびコミュニティに着目したユビキタスの展開
- (3) ユビキタスにおけるアンビエントインタフェースの有効性
- (4) 家の中におけるユビキタスコンピューティングの具体例
- (5) 思い出や記憶を支援するユビキタスコンピューティングの具体例
- (6) ユビキタス環境におけるプライバシー保護の解決可能性
- (7) 高齢者・障害者に対するユニバーサルデザイン的なユビキタスの利用
- (8) 生活をデザインする分野における具体的事例

本調査におけるこれら 8 のテーマに関して、国内研究者の研究チームを構成して調査するが、その際、特に、海外のこの分野のパイオニアの研究者を招聘してのワークショップ形式に重点をおき調査活動を行なう。ワークショップは、年数回程度開催の予定である。

SSR フォーラムの活動方針に従い、我々は、今年度末までにレポートを作成し、調査結果はすべて Web 上に保存する。

4. 調査研究の進め方(共同研究者など)

調査グループ構成メンバーは、次の通りとする。

主査	安村 通晃	慶應義塾大学 環境情報学部
メンバー	椎尾 一郎	玉川大学 工学部
	田中 二郎	筑波大学 電子・情報工学系
	葛岡 英明	筑波大学 機能工学系
	中西 泰人	東京農工大学 工学部
アドバイザー	美馬 のゆり	日本科学未来館
	野島 久雄	NTT MI 研
幹事	樋口 文人	慶應義塾大学 SFC 研究所

また、海外の大学・研究所における研究協力者(予定)の候補は次の通りとする。

Elizabeth Mynatt	ジョージア工科大学コンピューティング学部準教授 AwareHome ディレクター、GVU 所長
Gregory Abowd	ジョージア工科大学コンピューティング学部助教授、GVU 副所長
Mark Chignell	トロント大学機械工学部教授、インタラクティブメディアラボ所長
Hans Gellersen	ランカスター大学コンピューティング教授、Smart-Its プロジェクトメンバー
Charles Goodwin	UCLA 応用言語学部教授 CELF(Centers on the Everyday Lives of Families)のメンバー
Ted Selker	MIT メディアラボ準教授、Context-Aware Computing のリーダー

以上。